

道命阿闍梨と恋歌 —好色説話の周辺— (下)

Dōmyō Ajari and love poetry —In special relation to amorous anecdotes — (2)

柏木 由夫¹¹大妻女子大学文学部日本文学科Yoshio Kashiwagi¹¹Department of Japanese Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：諧謔，破戒僧，恋歌

Key word : Humor, Depraved monks, Love poems

抄録

八代集全体で恋部を主に、僧侶歌人に関わる恋の和歌を調べる。仏道修行に励む僧侶のために恋は日常的に認められるものではない。しかし、諧謔的な笑いが、通常ではない僧侶の恋が現実に入り得ることとする説得力を生む。こうした機微が僧侶の恋と諧謔が結びつく要因である。『後拾遺集』で僧侶歌人に関わる恋の贈答歌は飛躍的に増加する。八代集の恋部で、複数の贈答歌の作者となった僧としては、道命が代表。彼の破戒僧的な自由さが諧謔性や俗人性として表れ、艶聞の説話化もなされた。それらと恋歌の自由さは一連のものである。僧侶の俗人への恋着を表す「舎人の閨」という歌語をとともに用いていることから、仏教上の師である尋禅の周辺が道命の和歌形成に影響を与えたと推定する。

1. はじめに

前稿^[1]では、説話文学に描かれた道命の特質が、仏教者としての読経での美声と好色・諧謔であることを確認しつつ、『頼宗集』から好色と諧謔の二点の結びつきを述べ、また『梁塵秘抄』での評価を出発に、道命歌の遍昭歌からの継承と、和泉式部歌との表現面での大きい重なりを検証した。その結果、道命歌での好色性と絡む俗人的（前稿での「俗物的」を誤解を避けて改める）な諧謔性を確認し、それが和泉式部との艶聞に結びつけられる本であることを主張した。さらに新たな問題として、道命の勅撰集入集歌を手がかりに恋歌への注目を述べ、まず『道命集』で見られる恋歌の実態を見直した。

本稿では、前節末尾に続けて、八代集全体での僧侶歌人に関わる恋の和歌から、道命の和歌を見直したい。その前に、新日本古典文学大系の八代集に付された人名索引から、八代集での出家者と歌数を、恋歌に限定せず示しておく。

次の表でみるように、時代的に『後拾遺集』を画期として僧侶歌人とその歌数が増加するが、それは

以下に見る恋歌にも反映する。

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古
人数	10	12	19	46	34	33	80	50
歌数	67	25	48	165	75	56	246	340
全歌数	1100	1425	1351	1218	665	415	1288	1978
パーセント	6.1	1.8	3.6	13.5	11.3	13.5	19.1	17.2

2. 『古今集』『後撰集』

以下は、八代集の歌集ごとに恋部を中心として、作者が僧侶である場合と恋に僧侶に関わる場合をみてゆくが、内容によっては雑部等も含めた。該当歌につき、「題しらず」と公的和歌をA群とし、贈答歌をB群として分類して示すが、各群で作者が僧侶であるものはアラビア数字で通し番号を付した。

まず『古今集』では、

A群

題しらず：恋一 四七〇1素性法師，恋二 五五五
2素性法師，五七七3素性法師，恋四
六九一4素性法師，七一四5素性法師，
七二二6素性法師，恋五 七六八7兼芸
法師，七七〇8僧正遍昭，七九九9素性
法師
寛平御時御屏風に歌かかせ給ひける時，よみて
かきける 恋五 八〇二10素性法師

のように，A群のみとなる．すなわち多くが「題し
らず」，別に一首が屏風歌で贈答歌はない．素性法
師が一〇首中八首を占める．素性歌については，
「たとえば素性が『梅の花飽かぬ色香は折りてなり
けり』と詠む時の「梅の花」は，“手折られ，愛玩
される女”というような，限りなく女性イメージの
付与されるものとなって来る」²¹とも評される詠風
をも存し，恋歌に堪能な僧侶歌人であると確認され
る．また，この自然詠での恋歌の装いは，前稿に掲
げた遍昭の女郎花を詠んだ歌々や，末尾に掲げて注
目した道命歌の，

よりふして花をみるとて

あやしくも花のあたりにふせるかなをらばとが
むる人やあるとて（一七二）

にも通じる詠風といえる．

次に『後撰集』を示す．

A群

題しらず：恋三 七四二1戒仙法師

B群

- 〔一〕 浄蔵くらまの山へなんいるといへりければ
恋四 八三二 平中興女
すみぞめのくらまの山にいる人はたどるたどる
も帰りきななん
- 〔二〕 やまとのかみに侍りける時，かのくに介藤
原清秀がむすめをむかへむとちぎりて，お
ほやけごとによりてあからさまに京にのぼ
りたりけるほどに，このむすめ真延法師に
むかへられてまかりにければ，くににかへ
りてたづねてつかはしける
恋四 八七三 忠房朝臣
いつしかのねになきかへりこしかどものべのあ
さは色づきにけり

〔三〕 人につかはしける

恋六 一〇四四1戒仙法師

あさごとに露はおけども人こふるわが事のはは
色もかはらず

〔四〕 人のめにかよひける，みつけれ侍りて

雑二 一一六三2賀朝法師

身なぐとも人にしられじ世中にしられぬ山をし
るよしもがな

〔五〕 いその神といふてらにまうでて，日のくれに
ければ，夜あけてまかりかへらむとてとどま
りて，この寺に遍昭侍りと人のつげ侍りけれ
ば，ものいひ心見むとていひ侍りける

雑三 一一九五 小野小町

いはのうへに旅ねをすればいとさむし苔の衣を
我にかさなん

返し

雑三 一一九六3遍昭

世をそむく苔の衣はただひとへかさねばうとし
いざふたりねん

A群は一首のみ．B群は，詞書に加え和歌まで示
し，特に各組初めに〔 〕で組数を示したが，恋部
から雑部まで含めて五組六首．最初の二組では僧侶
は和歌作者となっていない．冒頭の浄蔵と平中興女
との関係は『大和物語』にも載るもので後述する．
次は和歌作者忠房が婚約者を僧侶に奪われた顛末が
語られる．三組目の戒仙法師の和歌は僧俗の区別な
い恋歌．その次の賀朝法師は人妻への恋をきっかけ
として和歌を詠んだ．五組目の二首は小野小町と遍
昭の諧謔的贈答である．これらは，戒仙法師を例外
として単純な恋歌はない．ここから思われること
は，僧侶が関わる恋は，通常の男女間での恋とは異
なるものという見方が根底にあるということであ
る．そのように特に思わせられるのが，初めに挙げ
た浄蔵と平中興女との関係で，『大和物語』に詳述
されている．

中興の近江の介がむすめ，物の怪にわづらひ
て，浄蔵大徳を験者にしけるほどに，人とかく
いひけり．猶しもはたあらざりけり．忍びてあ
り経て，人の物言ひなどもうたてあり，なほ世
に経じと思ひ言ひて失せにけり．鞍馬といふと
ころにこもりていみじう行ひをり．

さすがにいと恋ひしうおぼえけり．京を思ひ

やりつゝ、よろづのここといとおはれにおぼえて
行ひけり。泣く泣く打ち臥して、かたはらを見
ければ、文なむ見えける。なぞの文ぞと思ひて
取りて見れば、このわが思ふ人の文なり。書け
ることは、

墨染めの鞍馬の山に入る人はたどるたどる
も帰り来ななむ

と書けり。いとあやしく誰しておこせつらんと
思ひをり。もて来べきたよりもおぼえず、いと
あやしかりければ、またひとりまどひ来にけ
り。かくて又山に入りけり。さて、おこせたり
ける。

からくして思ひ忘るゝ恋しさをうたて鳴き
つる鶯の声
かへし、

さても君忘れけりかし鶯のなく折のみや思
ひ出づべき
となむ言へりける。

又、浄蔵大徳、
わがためにつらき人をばおきながら何の罪
なき世をやうらみむ
とも言ひけり。この女は二なくかしづきて、皇
子達・上達部よばひたまへど、帝にたてまつら
むとてあはせざりけれど、このこといできにけ
れば親も見ずなりにけり。

(『大和物語』百五段)

当事者の二人は恋仲だったが、「人の物言ひなど
もうたてあ」るために結ばれず苦しむことがこの物
語の主内容である。ここには、『僧尼令』の「人を
殺し、奸し、……聖道得たりと称せらば、……罪科
せよ」が文字通り守られていないにせよ、根底には
僧侶は仏道修行に励むことが責務で、恋は日常的に
認められるものではないという考えがあるのではな
いかと思う。『後撰集』で他のB群に挙げられたも
のも、それが共通の前提とされる非日常的な恋とし
て注目されているのだと思われる。

特に遍昭と小野小町の贈答は諧謔的な雰囲気満
ちているが、笑いを誘う内容であることが、通常の
男女間ではない関係を有り得ないことだと拒否させ
ない説得力を生んでいると言えるだろう。ここに僧
侶の恋と諧謔が結び付く要因があるように思われ
る。

『後撰集』に見たことは道命にも繋がるように思

う。平中興女の和歌に道命が親しんでいたことは、
『道命阿闍梨集』の

五月にくらまにまうでて侍りしに
さつきやみくらまの山にほととぎすたどるたど
るやなきわたるらん(四〇)

で知られ、遍昭と小野小町の諧謔的な恋の贈答は、
道命と和泉式部の説話にも引き継がれていると思わ
れる。

3. 『拾遺集』『後拾遺集』

次に『拾遺集』を示す。

B群

大嘗会の御禊に物見侍りける所に、わらは
の侍りけるを見て、又の日つかはしける

恋一 六六二1寛祐法師
あまた見しとよのみそぎのもろ人の君しも物を
思はするかな

おこなひせんとて山にこもり侍りけるに、
さとの人につかはしける

恋四 九一四2読み人知らず
ひとにだにしらせでいりしおく山に恋しさいか
でたづねきつらん

B群のみで、一首目は、相手を「わらは」とする
ものの初出。二首目は、仏道修行と恋の相反性が詠
まれていて、内容から作者は僧侶と判断した。

次に『後拾遺集』を示す。

A群

題しらず：恋一 六一八1 道命法師，六二四2
能因法師，六三三3 道命法師，六
四五4永源法師，六五一5能因法師，
恋二 六七四6永源法師，恋三 七
六二7権僧正静円，恋四 七七四8惠
慶法師，七八五9 道命法師，七八
八10能因法師

はじめのこひをよめる

恋一 六一三11実源法師
長久二年弘徽殿女御家の歌合しはべりけるによ
める

恋一 六五七12永成法師
ふみにかかむによかるべきうたとて俊綱朝臣人
人によませはべりけるによめる

恋一 六五九13良暹法師

B群

はじめたる人につかはしける

恋一 六〇五1叡覚法師

このはちる山のしたみづうづもれてながれもや
らぬものをこそおもへ

かへりごとせぬ人のことひとにはやるとき
きて（正保版本では「人」が「女」）

恋一 六二六2 道命法師

しほたるるわがみのかたはつれなくてことうら
にこそけぶりたちけれ

かへりごとせぬ人に山でらにまかりてつか
はしける

恋一 六二七3 道命法師

おもひわびきのふ山べにいりしかどふみみぬみ
ちはゆかれざりけり

ひごろけふとたのめたりける人のさもある
まじげにみえ侍ければよめる

恋一 六六三4 道命法師

うれしともおもふべかりしけふしもぞいとどな
げきのそふこちする

これたふの朝臣にかはりてよめる

恋二 六六六5永源法師

よをこめてかへるそらこそなかりつけれうらや
ましきはありあけの月

あひそめてまたもあひはべらざりけるをむ
なにつかはしける

恋三 七一八6叡覚法師

あきかぜになびきながらもくずのはのうらめし
くのみなどかみゆらん

ものへまかりけるに鳴海の渡りといふ所に
て人をおもひいでてよみはべりける

恋三 七三〇7増基法師

かひなきはなほひとしれずあふことのはるかな
るみのうらみなりけり（増基法師集・八七「を
はり、なるみのうらにて 和歌同文」）

たのめけるわらはのひさしうみえはべらざ
りければよみはべりける

恋三 七三三8律師慶意

たのめしをまつにひごろのすぎぬればたまのを
よわみたえぬべきかな

おもひけるわらはの三井寺にまかりて久し
く音もし侍らざりければよみ侍ける

恋三 七四一9僧都遍救

あふさかのせきのしみづやにごるらんいりにし
ひとのかげのみえぬは

語らひ侍りけるわらはの異人に思ひつきに
ければ久しう音もせで侍りけるに、さすが
におぼえければよみてつかはしける

恋三 七四三10前律師慶暹

よそひとになりはてぬとやおもふらんうらむる
からにわすれやはする

[七月七日にをむなのもとにつかはしける]¹³⁾

恋三 七六八11増基法師

たなばたをもどかしとみしわがみしもはてはあ
ひみぬためしにぞなる（増基法師集・一〇九
「おなじ日、うらやまれぬるなど思ひ侍りて
和歌同文」）

としごろあはぬ人にあひてのちにつかはし
ける

恋四 七七二12 道命法師

あひみしをうれしきこととおもひしはかへりて
のちのなげきなりけり

くまのへまゐるとて人の許にいひつかはし
ける

雑一 八八五13 道命法師

わするなよわするときかばみくまのうらのは
まゆふうらみかさねん

おもはんとたのめたりける人のさもあらぬ
けしきなりければよみはべりける

雑一 八八六14 道命法師

わすれじといひつるなかはわすれけりわすれむ
とこそいふべかりけれ

つらかりけるわらはを恨むとて音し侍らざ
りければ、わらはのもとより「我さへ人
を」¹⁴⁾と言ひにおこせて侍りければよめる

雑二 九五三15律師朝範

うらみずはいかでか人にとはれましようきもうれ
しきものにぞありける

かたらはんといひて道命法師のもとにまう
できたる人のよみはべりける

雑四 一〇九二 よみ人しらず

たえやせんいのちぞしらぬみなせがはよしなが
れてもこころみよきみ

良暹法師ものいひわたる人にあひがたきよ
しをなげきわたり侍けるに、今日なんかの
人にあひたるといひおこせて侍ればつか
はしける

雑四 一〇九四 藤原孝善

うれしさをけふはなににかつつむらんくちはて
にきとみえしたもとを

本稿冒頭で述べたように『後拾遺集』から僧侶歌

人が急増することを反映して、彼らが恋に関わる歌はA群・B群ともに飛躍的に増加する。作者が僧侶の場合は、通し番号でA群は13、B群は15となる。そのうちB群のみ歌の内容を簡単に確認する。1...心が滞る恋の初め, 2...相手の心離れをなじる, 3...冷たい相手への執着, 4...期待外れの嘆き, 5...後朝の帰り難さ(代作), 6...会不会恋, 7...恋人に遠ざかる悲しみ, 8...童に会えず死ぬ思い, 9...童の無沙汰, 10...童の心離れへの恨み, 11...七夕同様会えない思い, 12...稀に会う嘆き, 13...相手の心不変を迫る, 14...破約する相手への皮肉, 15...恨んだ効果を喜ぶ。B群はなお残り二首だが、前者は『定頼集』にも載るもので後述する。最後の一首は、良暹法師の恋が成就したことを友人として喜ぶものだろうか。A群B群全体についての注目点としては、道命歌が二八首中の九首にあって、そのうち六首は贈答歌であること。また、道命以外では相手を「わらは」とするものが四首あり、「をんな」が二首あることである。

4. 道命と藤原定頼

右で見たように、『後拾遺集』での僧侶歌人の急増が恋歌にも反映していると確認でき、その中でも道命の存在の大きさが知られる。道命と贈答を交わした相手はほぼ不明だが、道命に関わる中で唯一彼が作者ではない一〇九二は、『定頼集』にも載るもので、二人の交情の深さを伺わせる資料の一つである。以下では、道命と定頼の関係を①～⑤の資料で確認する。

- ① やはたの臨時祭のかへさの日、夜ふけにければ、定頼の少将のおくりしける車にかうぶりおとしたりける、又の日やるとて人のかくれたるまことやありしちはやぶるかみもあはれになりけるかな
かへし
ももしきのこのゑのみかどすぎさまにかざしのはなもちりにけるかな
(道命阿闍梨集・一〇六、一〇七)

①は、寛弘七年(一〇一〇)三月十二日条に定頼が八幡の臨時祭の舞人だった時(『御堂関白記』による)のもので、定頼が一六歳、道命は三七歳か。「『道命阿闍梨集』注釈(四)」に示した「現代語

訳」を転記する。

八幡の臨時祭の還立の日、夜が更けたので、定頼の少将は帰りの送りをした車に冠を落としてしまった。翌日、冠を返すということで、人が送った
常人には見えない石清水八幡の神様の真意ではないが、あなたは冠の中には隠れている本当の姿があったのか。霊威ある神ならぬ頭の髪が、むき出しになって情ない様になったことですよ。

返事

神楽歌に「巾子(こじ)落つ」とあって、冠を落とすとされる陽明門を通り過ぎる時に、冠に挿した花も散り落ちてしまいましたよ。

右で一〇七の作者が定頼だが、道命の歌はない。不審はあるが、知己の定頼に関する諧謔的な贈答歌を、面白く興味深いものとみる判断によって『道命集』に収めたのだろうか。

- ② 道命阿闍梨、あひてかたらはんなどいひて、中中なるはいとむつかし、さりとさらば、いみじくむつましく、などいひて、また
たえやせん命ぞしらぬみなせがはよしながれても心みよ君 (定頼集・一一二)
- ③ 七月二日、道命阿闍梨きて、いでたりしかば、えあはでいへる
ひこぼしにいまひとひだにまさらんとおもひしかひもなくてやみにき
かへし
ひこ星にまさる事こそかたからめひとしくだにも待ちぞかねつる (同集・一一九、一二〇)
- ④ 天王寺あざり、こんといひてみえざりしかば
夜もすがらたたく水鶏のこゑごとにこむとたのめし君かとぞとふ
返し
打ちたたく水鶏をあやなわれとてや天の岩戸にしめをかくらん (同集・二九二、二九三)
- ⑤ みたけさうじせし時に、かのあざりのおくれる
よしの山さかしきみねをたひらかに行きかへるべきいのりをぞする

返し

祈るらんことにしかなふ名にしおはばよしのの
山のあしからめやは (同集・二九四, 二九五)

②以下はすべて『定頼集』に見えるもので、まず②は、本節冒頭触れたもので、『後拾遺集』(雑四・一〇九二・読人しらず)に

かたらはんといひて道命法師のもとにまう
できたる人のよみはべりける

の詞書で入集している。両集の詞書には若干の差があり、実体は不明瞭だが、森本元子著『定頼集全釈』(私家集全釈叢書)では、「道命は好色無双と評されたが、112の歌、あるいは後出119など、定頼への交情には男色をうかがわせるものがある」とされ、「恋とすれば、忍んでいた思いを打ち明ける段階」¹⁾ともされる。③は、二人の間を七夕の恋人同士に例える。「恋とすれば、相思相愛の仲であるが、逢瀬の機会が稀なことを互いに嘆く段階」²⁾とされる。④は、水鶏の声を道命の訪れに例えた定頼に、「天の岩戸」伝説を基に自分を水鶏として拒むのかと道命が切り返したもので、「一応恋歌らしく作ってはあがるが、感傷的な所がない。殊に、返歌のユーモアは抜群。訪れるのは常に道命で、待つのが定頼らしい」³⁾とする。⑤は、「金峯山参籠を予定している定頼は御嶽精進中であつた。道命の許から、無事に帰還なさるよう祈禱しているという便りが届く」⁴⁾とあるが、定頼も祈禱に答えて無事の帰還を約束する返しをしている。以上見るように、二人の贈答歌は、一見すると通常の男女の恋に変わらないとも言えるものだが、同時に④に典型的な諧謔性もあり、これらの恋歌のやりとりは、実はその底に一種の演技的な面があるのかとも想像させられる。

5. 『金葉集』『詞花集』

八代集に戻り、『金葉集二度本』を見る。

A群

従二位藤原親子家草子合に恋の心をよめる
恋上 三五六1宣源法師 (三奏 三七四)
恋の心を人人のよみけるによめる
恋上 四〇三2律師実源
はじめたる恋の心をよめる
恋下 四二一3良暹法師 (三奏 四二二)

奈良の人人百首歌よみ侍りけるにうらみの心を
よめる 恋下 四三〇4権僧正永縁
恋の心をよめる 恋下 四三一5隆源法師
三井寺にて人人恋歌よみけるによめる
恋下 四八八6僧都公円

B群

多聞といへるわらはをよびにつかはしける
に見えざりければ、月の明かりける夜よめる
恋下 四五三1権僧正永縁
まつ人のおほぞらわたる月ならばぬるたもと
にかけは見てまし
物へまかりける道にはしたもののあひたり
けるをとせ侍りければ、上東門院に侍り
けるすまひこそとなん申すといひけるをよめる
恋下 四六四2源縁法師 (三奏 四六〇)
名きくよりかねてもうつるころかないかにし
てかはあふべかるらん
良暹法師うらむることありけるころ、むつ
きのついたりまうできてまたひさしく見
えざりければつかはしける
雑上 五三四3律師慶範
春のこしそのひつらはとけにしをまたなにご
とにとどこほらん
をとこ心かはりてまうでこずなりてのち、
置きたりける餌袋をとりにおこせたりけれ
ばかきつけてつかはしける
雑上 五六五4桜井尼
のきばうつましろのたかのゑぶくろにをきゑも
さきでかへしつるかな

B群は四首で、それぞれは、1・2...「わらは」と「はしたもの」への思い、3...僧侶二人の心の行き違いからの戸惑い、4...「をとこ」への尼の歌。3・4は、雑部の歌だが、恨みや心変わりとあるので恋歌とした。

これに、『金葉集三奏本』では次の一首が加えられる。

B群

女のもとへつかはしける
恋下 四三三 増基法師
わがおもふことのしげさにくらぶればしのなの

もりのちえはものかは

これは『増基法師集』四に詞書が「いづみなる信太のもりにて、あるやう有るべし」としてあり、『詞花集』でも「雑下」三六四に「題しらず」で入っている。『いほぬし精講』（増淵勝一著）では、「撰者顕輔の見識を示したものと評している。

続けて『詞花集』を見る。

A群

題不知：恋上 一八九1隆恵法師，一九七2覚念法師，二〇〇3浄蔵法師，二〇4能因法師，二二二5 **道命法師**，恋下 二四四6恵慶法師，

恋の歌とてよめる 恋上 二〇九7隆縁法師
ひえの山に歌合し侍りけるによめる

恋上 二二四8心覚法師

B群

三井寺に侍りける童を、京に出でばかならず告げよとちぎりて侍りけるを、京へ出でたりとは聞きけれども、訪れ侍らざりければいひつかはしける

恋上 二〇七1僧都覚雅

かげみえぬきみはあまよの月なれやいでも人にしられざりけり

春になりてあはむとたのめたる女の、さもあるまじげにみえければいひつかはしける

恋上 二一五2 **道命法師**

やまざくらつひにさくべきものならば人の心をつくさざらなむ

冬のころ、くれにあはむといひたるをんなに、くらしかねていひつかはしける

恋上 二三一3 **道命法師**

ほどもなくくるとおもひし冬の日のころもとなきをりもありけり

弟子なりけるわらはの、親に具して人の国へあからさまにとてまかりけるが、久しくみえ侍らざりければ、たよりにつけていひつかはしける 恋下 二五三4最厳法師
みかりののしばしのこひはさもあらばあれそりはてぬるかやかたをのたか

いとほしくし侍りけるわらはの、大僧正行尊がもとへまかりにければいひつかはしける 恋下 二五九5律師仁祐

うぐひすはこづたふはなのえだにてもたにのふるすをおもひわするな

かへし、わらはにかはりて

恋下 二六〇6大僧正行尊

うぐひすは花のみやこもたびなればたにのふるすをわすれやはする

B群は六首あり、1・4・5の三首は、「わらは」の訪れへの期待と落胆を詠み、6は「わらは」への代作歌。2・3の二首は、道命による会えない女への贈歌。

6. 『千載集』 『新古今集』

次は『千載集』である。

A群

題不知：恋一 六六四1寂然法師，六八三2賢智法師，六八八3祐盛法師，恋二 七二二4恵法師，七二五5道因法師，七三四6寂超法師，七三六7道因法師，七三七8顕昭法師，七三八9源慶法師，七三九10朝恵法師，七五五11法印静賢，七五六12俊恵法師，恋三 八一八13道因法師，恋四 八七五14円位法師，八七六15円位法師，八七七16空人法師，恋五 九二七17俊恵法師，九二八18円位法師

歌合し侍りける時、しのぶこひの心をよみ侍りける 恋一 六六七19顕昭法師

恋のうたとてよみ侍りける

恋一 六九九20法眼実快，七六五21寂蓮法師，七六六22俊恵法師，七七〇23静縁法師，八九六24法印静賢，恋四 八九三25道因法師

後三条内大臣家に歌合し侍りける時、恋歌とてよめる 恋二 七三〇26道因法師

乍臥無実恋といへる心をよめる

恋二 七五三27西住法師

旅恋の心をよめる 恋三 七九一28僧都覚雅
歌合し侍りけるときよめる

恋四 八一七29顕昭法師

百首歌よみける時、恋歌とてよめる

恋四 八六一30顕昭法師

歌合し侍りける時、恋歌とてよめる

恋四 八八五31俊恵法師
逢不逢恋といへる心をよめる

恋四 八九四32俊恵法師
堀河院御時、百首歌たてまつりける時、うらみ
の心をよめる 恋五 九一六33隆源法師

月前恋といへる心をよめる
恋五 九二九34円位法師、九三〇35寂超法師
恋歌とてよめる 恋五 九三一36祐盛法師
秋夜恋といへるころをよめる

恋五 九五二37顕昭法師

B群

語らひけるわらは、思はずうとくなりにける
のち、亡くなりにけるを、人のとぶらひ
て侍りければよめる

哀傷 五八〇1静巖法師
かなしさをこれよりげにやおもはましかねてな
らはぬ別なりせば

横川の麓なる山寺にこもりみ侍りける時、
いとよろしきわらはの侍りければ、よみて
つかはしける 恋一 六七二2仁昭法師
世をいとふはしとおもひしかよひちにあやなく
人を恋ひわたるかな

女をかたらひ侍りけるを、いかにもあるま
じきことなり、おもひたえねといひ侍りけ
ればよめる 雑下 一一九八3安性法師
つらしとてきてはよもわれ山がらすかしらはし
ろくなる世なりとも

『千載集』では、圧倒的にA群が多い。B群で
は、1...「わらは」への哀傷歌、2...「わらは」への
恋心、3...女への断念の辛さ、が詠まれている。複
数ある作者は、俊恵六首、顕昭・道因五首、円位四
首だが、彼らにB群の贈歌はない。

最後は、『新古今集』である。

A群

題しらず：恋二 一〇九九1西行法師、一一
四七2同、一一四八3同、恋三 一
一五五4同、一一八五5同、一一九
三6同、一二〇〇7同、一二三〇8
同、恋四 一二六七9同、一二六
八10同、一二六九11同、一二八〇
12法眼宗円、一二九〇13法橋行

遍、一二九七14西行、一三〇七15
同、恋五 一三八六16寂蓮法師、
一四〇四17素性法師

百首歌たてまつりし時よめる

恋一一〇三〇18前大僧正慈円
家に歌合し侍りけるに、夏恋の心を

恋一 一〇三二19寂蓮法師
摂政太政大臣家歌合によみ侍りける

恋二 一一一八20寂蓮法師
入道前関白太政大臣家歌合に

恋二 一一二321道因法師、

恋四 一三〇八22俊恵法師
恋歌とてよめる 恋三 一二〇五23西行法師

摂政太政大臣家百首歌合に、契恋のころを
恋三 一二二324前大僧正慈円

摂政太政大臣家百首歌よみ侍りけるに
恋四 一二八七25寂蓮法師

建仁元年三月歌合に、逢不遇恋のころを
恋四 一三〇二26寂蓮法師

家歌合に 恋四 一三一127前大僧正慈円
和歌所にて歌合侍りしに、あひてあはぬ恋の

心を 恋四 一三一228寂蓮法師
摂政太政大臣家歌合に

恋四 一三二129寂蓮法師
恋歌とてよみ侍りける

恋四 一三二230前大僧正慈円
摂政太政大臣家百首歌合に、尋恋を

恋四 一三二七31前大僧正慈円
暁恋の心を 恋四 一三三〇32前大僧正慈円

水無瀬恋十五首歌合に
恋五 一三三八33前大僧正慈円

右に見るように、『新古今集』では、B群の贈答
歌はまったく見られずA群のみで、西行一四首、寂
蓮・慈円七首が入集多数の歌人である。

7. 八代集のまとめ

ここまで、八代集全体での僧侶歌人が関わる恋歌を見てきたが、その和歌数一覧を次に表示する。

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古
題不知 + 題詠 A群	10	1	0	13	6	8	37	33
	V	Λ	Λ	Λ	V	V	V	V
B群 贈答歌 恋部 + 他	0 II 0	3 II +	2 II 2	15 II +	4* II +	6 II 6	3 II 1	0 II 0
		2		3	2		2	

*「金葉」は、二度本のみ。

この表と、ここまでの論述の要点をまとめると以下ようになる。まず、総数は『後拾遺集』・『千載集』で急増するが、これは本論冒頭で述べた『後拾遺集』以後の全体的な僧侶歌人と歌数増に連動するもの。次に、A群とした題詠等（観念）とB群とした贈答歌（実生活）では、後撰から後拾遺までは、B群の贈答歌が優勢、古今とその復活と見る面のある千載・新古今はA群の題不知・題詠が優勢である。また、八代集の恋部で、贈答歌複数の作者となった僧は三名で、道命阿闍梨六首、増基法師三首、叡覚法師二首で、道命を代表者とも見なし得る。しかし、道命歌は家集に入っておらず、和泉式部との艶聞に見るようなイメージ形成との連動による勅撰集入集も想定されるが、散逸した道命阿闍梨家集があったかとの推測をも促すと言える^[6]。

8. 道命と尋禪

以上、八代集で調査した結果、僧侶歌人による恋の贈答歌という恋歌の有り様そのものの時代傾向に染まる中で、道命がその代表とも言えることが明らかとなった。では、彼にとってこうした恋歌はいかにして可能になったのだろうか。道命についてのそうした問いは、彼の本来的な面に関わることだろうと考える。つまり、彼の破戒僧的な自由さが諧謔性や俗人性として表れ、艶聞の説話化もなされたのであり、それらと恋歌の自由さは一連のものだと思うのである。

以下では、道命の俗人的な自由さがどのようにし

て育まれたかについて考えさせるものとして、彼の仏教上の師である尋禪^[7]との関わりを指摘したい。道命が直接に師の尋禪に触れているのは、次に挙げる師への哀傷歌の一首のみである。

小法師にて師におくれて、山寺にて
めにもみず音にもきかぬおく山ををしへおきけ
るきみはいづちぞ（道命阿闍梨集・一〇八）

一方、尋禪の和歌が一首のみだが知られる。

惠慶法師はりまの講師になりてくださるに
権僧正

うちはへてとねりのねやに入る人は播磨かちに
やあらんとすらん

（続詞花集・戯咲・九七九）

右の和歌について、鈴木徳男著『続詞花和歌集新注』（新注和歌文学叢書）では、「あなたが播磨の国分寺に下向したならば、引き続いて舎人の寝所に入る人のように、播磨の地にいつづけがちになるでしょう」との現代語訳が示されている。用いられた特徴的用語の「とねりのねや」には、どのような意味と状況や価値観があるのかを、他の用例から確認したい。

健守法師、仏名の野伏にてまかりいでて侍
りける年、いひつかはしける

源経房朝臣

山ならぬすみかあまたにきく人の野ぶしにとく
も成りにけるかな

返し

山伏も野伏もかくて心みつ今はとねりのねやぞ
ゆかしき（拾遺集・雑下・五二八、五二九）

法師の園にをとこありとて、法師のうれへ
申さむといふをききて

いにしへはとねりのねやの物語かたりあやまつ
人ぞあるらし（仲文集・一九〈冷泉家本〉）

上記以外、『宇津保物語・蔵開下』にも用例があるが、右の『拾遺集』の贈答歌は、仏名の折に野伏に出るのを住処が多いと冷やかした源経房に、健守法師がすでに山も野も住処にしたが、今は舎人の閨

が恋しいと応えたものである。『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）の脚注では、「とねりのねや」について、「舎人の宿所に僧侶が忍び込む、という稚児物語的な伝承があったといわれる」とある。次の『仲文集』の和歌は、法師が、彼らの坊などに俗人が紛れ込むことを訴えたことに対して詠まれたもので、片桐洋一他著『仲文集』（私家集全釈叢書）の「通釈」には、「昔は（法師が舎人の宿所にしのびこむ、という）舎人の閨の物語があったけれども、（逆に、法師の宿舎の方に男がしのびこむというふう）に語り誤って伝えた人がいるらしいよ」とある。つまり、これらは共通の伝承を基にしているらしく、その伝承とは、仏教者が俗人の男に恋し執着するというものらしい。それはいわゆる男女間の恋とは異なる、何らかの笑いを誘う滑稽味あることと解されていたのではないと思われる。そのような語を尋禪も詠んでいる。播磨に下向する恵慶に、その地に馴染み長居することを舎人の閨に執着する僧に例えて揶揄った内容ということになる。そして、道命もこの言葉を一首に詠んでいる。

かみなくなりたる人の、えぼうしをわすれて、
又の日こひにおこせたるやるとて
これなくてよごとにかでありつらんとねりの
ねやと人もこそいへ（道命阿闍梨集・二八三）

髪のない人が烏帽子を忘れたのに返す時に添えた歌で、髪のないあなたが烏帽子なしだと、舎人に執着する僧侶だと毎夜言われるとからかったものだろう。道命らしい諧謔味のある歌と言える。この同じ語を師である尋禪も用いているということから考えると、道命がこの「舎人の閨」という語を知り、そうした語を用いる和歌の世界に親しんだのは、仏教の師である尋禪の下でのことではなかったのだろうかと思わせる。

尋禪は右大臣藤原師輔の息だが、比叡山中興の祖である良源¹⁸⁾の後継者となり、藤原撰関家を背景にした比叡山の経済的基盤確立に寄与したが、宗教界の俗化をもたらしたともされる。聖なる世界に文字通りそのような変化を与えたとするなら、宗教界の重鎮である尋禪が「舎人の閨」などという俗人的な色欲を表す語をもちいることもあり得ることで、その尋禪の下で育ったことが道命の和歌形成に少なからぬ影響を与えたとも考え得るのである。「舎人の

閨」という一語の重なりだが、こうした道命の謹厳な仏教者らしからぬ破格とも言える自由さの出発は、師である尋禪の周辺に求められるのではないかと考えるのである。

9. 結論

前稿についての要約は本稿冒頭に述べたので、本稿の内容についてのみ要点を以下に述べる。まず、僧侶が関わる八代集の恋歌を調査した。その結果、「題しらず」とされるものと題詠などの公的和歌に対し、贈答歌が優勢なのは、『後撰集』から『後拾遺集』だった。道命はその作者での代表格と言える。彼の相手で代表的なのが藤原定頼だが、ほかにも相手は同性から異性に及ぶ。道命の諧謔性と恋歌はひとつながりのもので、その出発は宗教上の師である尋禪の下と考える。

僧侶が実生活で恋の贈答歌を交わすこと自体、破戒的で宗教の墮落とも考え得るが、遍昭と小町の贈答で触れたように僧侶にとって禁断の営みを成り立たせる大きな要因こそが諧謔だったと考える。あるいは、遍昭の和歌に見られる洒脱性以来、そうした俗人性をも包摂し、人間の本来を肯定した上で立つ大きな宗教観があるとの見方も可能だろう。道命と同時代の僧侶歌人の恋の和歌の実相については、なお考察が必要と思われる。

引用文献

- [1] 柏木「道命阿闍梨と恋歌—好色説話の周辺—（上）」『大妻国文』47号 平成28年3月
- [2] 近藤みゆき著『古代後期和歌文学の研究』「第四章「歌ことば」に見る規範の形成と変容」
- [3] 詞書の[]は、前歌の詞書に同じの意。『いほぬし精講』「評説」には、「本来は遠江国での独詠である。都の恋人へ本歌を送ったかどうかはわからない」とある。
- [4] 「題不知 読人不知 つらしとてわれさへ人をわすれなばさりとてなかのたえやはつべき」（詞花集・恋下・二五一）を引く。
- [5] 「道命阿闍梨伝考—晩年の軌跡—」三保サト子 稲賀敬二編著『論考 平安王朝の文学—一条朝の前と後』平成10年11月
- [6] 『玄々集』『続詞花集』に現存家集にない歌がある。

道命阿闍梨一首 熊野にまゐりて月を見て
都にてながめし月のもろともにたびの空にもい
でにけるかな (玄々集・一二六)

[7] 【尋禪】九四三 - 九九〇 平安時代中期の僧。十
九代天台座主。号飯室和尚・妙香院。諡号慈忍。天
慶六年(九四三)生まれる。右大臣藤原師輔十男。
母稚子内親王。師良源。天徳二年(九五八)延昌に
受戒。権門藤原氏の後援と良源の推挙により異例の
出世を遂げる。天延元年(九七三)楞嚴院一身阿闍
梨。同二年権少僧都。のち権僧正に至る。正暦元年
(九九〇)二月十七日横川の別所飯室で没。四十八
歳。著書『金剛宝戒章』『摩訶止観略決』など。
(『国史大辞典』より抜粋。項目担当は、三保サト
子氏。)

[8] 【良源】九一二 - 九八五 比叡山中興の祖。第十
八代天台座主。(中略)才能はありながら有力後援
者をもたなかった良源は、権力者藤原忠平・師輔の
後援を得、村上天皇皇子出産をめぐって祈祷師的位
置を獲得、慈覚派の故地横川を整備し、一連の堂舎
整備、弟子尋禪を介した藤原氏の荘園寄進などによ
る経済的基盤の確立、綱紀の肅正、修学の奨励に務
めた。一方、師輔息尋禪を後継者として、以後権門
子弟の優遇による俗化や、智証門徒の圧迫による紛
争、僧兵の組織など、比叡山の繁栄とそのひずみ
を作った。(『国史大辞典』より抜粋。項目担当は、
平林盛得氏。)

Abstract

This study investigates the relationship between love poetry and monk poets in the literature of the Heian period. Special attention is paid to love poems in the section of love poetry in *Hachidai-shū* (the eight imperial collections of *waka* poetry). Love affairs are generally prohibited to monks who ought to be devoted to Buddhist spiritual discipline. However, humor and laughter perceived in those love poems give reality to monks' love affairs and, consequently, persuade the readers fairly well. Seen from creation of literature, humor and monks' love can be combined as innovative and creative factors of poetic art.

Love poetry, especially poems exchanged between lovers involving monks drastically increase in number in *Goshūi-shū*. As for the love section of *Hachidai-shū*, Dōmyō is best known as the monk who made a number of such poems. His licentiousness characteristic of depraved monks emerges as humor and secularity, which seem to endorse the truth of his love anecdotes. His love stories and frivolity of his love poems have much in common. They both share a poetic term, *toneri-no-neya*, which expresses monk's affective feelings towards lay people. It can be safely said that this shared term provides enough evidence to the assumption that the people around Jinzen, who is the mentor of Dōmyō, influenced him in his creation of *waka* poetry.

(受付日：2016年3月17日，受理日：2016年3月25日)

柏木 由夫 (かしわぎ よしお)

現職：大妻女子大学文学部日本文学科教授

東京教育大学大学院日本文学専攻修士課程修了。

専門は平安時代和歌文学。現在は平安時代中・後期の和歌文学に関する研究を行っている。

主な著書：平安時代後期和歌論 (単著，風間書房)